



マサミ・コバヤシ・ウィーズナー  
MASAMI KOBAYASHI WIESNER  
[著]

彩流社

マサミさんの果たした役割——序にかえて

命の綱と思っていた薬の中にエイズウイルス(HIV)が入り込み、その使用によってエイズになってしまったとしたら……。こんな悪夢のようなできごとが現実起こったのが、いわゆる「薬害エイズ」事件だった。

エイズが蔓延していたアメリカから輸入した血液製剤の使用によって、約五〇〇〇人いる日本の血友病患者のうち一八〇〇人以上がHIVに感染してしまったのだ。もちろん被害は日本だけではなく、汚染製剤を輸出していたアメリカでも、六〇〇〇人を超える被害が発生していたのだが、このことは案外知られていない。

日本の薬害エイズ事件は、一九八九年五月、赤瀬範泰氏が自らのHIV感染を公表して提訴したのを皮切りに、大阪と東京の裁判所に持ち込まれた。裁判は、汚染製剤を販売した製薬会社とこれを放置した国に損害賠償を求めるものであったが、責任追及は遅々として進まなかった。三年目を迎えて、東京ではじまった医師らの証人尋問に期待がかかったが、被告弁護団の周到な反対尋問で崩され、思うような成果は得られなかった。厚生省や製薬会社が真相を明らかにせず、当時の資料を隠す態度でいたこともあって原告側の証拠不足は明らかだった。

徳永信一(大阪HIV訴訟原告代理人)

サンフランシスコに赴き、マサミさんとはじめて出会ったのは、そんな閉塞状況にあった頃のことだった。

局面を打開するためには汚染製剤を輸出していたアメリカの事情を調査し、新たな証拠を入手しなければならなかった。しかし、全くの手さぐりではじまった調査は、言葉の壁もあり、なかなか思うように進まない。現地の協力者が必要だった。

共通の友人であった「EIV人権情報センター」の屋敷恭一氏からエイズ関連のボランティア団体と交流があり、通訳としても確かだというマサミさんの紹介を受けたときは、まさにわたりに船に思えた。

マサミさんの協力を得て、それまで霧の中でもややもやしていたアメリカの事情が見えはじめた。こちらの無理難題に対し、四方八方に手を尽くして製薬会社と闘っている感染被害者を探し出し、この事件を担当している弁護士と連絡を取り合い、被害発生当時の事情に詳しい医師や科学者にあたっていった。ざっくばらんで面倒見のよい江戸っ子気質が信頼されたのだろう。彼女は、知り合った被害者や専門家と親しくなり、たちまちのうちに強力な全米ネットワークができあがっていった。

小柄な身体はどこにこんな馬力があるのかと驚くような勢いで、彼女は薬害エイズの謎の密林にどんどんわけいっていった。

アメリカ調査で入手した証拠資料は、劣勢だった裁判の情勢を徐々に挽回していった。

九三年に大阪の裁判所で証言した元CDC（米防疫センター）のドナルド・フランシス博士とのつながりも、彼女のネットワークによるものだった。CDCによる最初のエイズ報告のときから、

その原因追求の先頭を走っていた博士の証言は、製薬会社と国の賠償責任を明らかにするうえで決定的なものとなった。

しかし、裁判の帰趨とは別に、アメリカのエイズ事情を知れば知るほど、なぜこんな悪夢が起こったのかという根本的な謎は、かえって深まるばかりであった。

薬害の見張り番として日本では神格化されているFDA（米国食品医薬品局）も薬害エイズに関しては、後手後手に回り、日本のをはるかに上回る被害の発生を許してしまった。肝炎対策として承認された加熱製剤は、医療現場ではずっと後まで使用されていなかったのである。

被告側が最後の砦として当時FDAで血液製剤の規制を担当していたアロンソン博士を証人に申請したのもそんな背景があったからだ。

全米ネットワークは、アロンソン博士の尋問対策にもフルに機能した。横浜エイズ会議で来日したブルース・エヴァット博士の協力を得たことは幸運だった。

九五年一〇月、東京、大阪の両裁判所は、国と製薬会社の賠償責任を明らかにする「所見」を出した。解決への機運は一気に高まり、九六年三月、被害者全員に対し四五〇〇万円の一時金の支払いを骨子とする歴史的和解が成立した。

和解の成立後も続く薬害エイズ事件の真相究明は、国会での茶番のあと、刑事司法の場に移されようとしている。ミドリ十字、安部英医師、厚生省に対する強制捜査が行われ、マスコミは連日の加熱報道を繰り返し、彼らの非道を暴き立てている。

しかし、薬害エイズの密林に分け入り、巨大な象の姿を垣間見たマサミさんは、未だ謎の中を彷徨っているようだ。そして、僕もまだ、出口を見出せないでいる。